

パネルディスカッション・質疑応答

パネルディスカッション・質疑応答

パネリスト

木村 清孝

納富 常天

関根 透

司 会 矢島 道彦

司会

これから質疑応答に入らせていただきます。ただいまは、木村先生のお話の後、納富先生と関根先生からご発表をいただきましたが、お二人のご発表はまったく違った内容でございましたので、とても楽しめましたね。御移転の要因もさまざまなことがあったようですし、移転先についても、いまは鶴見にあつて当然のように思っていますけれども、実際は、いろいろなところが候補地にあがつていたようであります。また御移転の計画そのものが、実はついぶん前からあつたとか、いろいろなことを教えていただきました。

それではここからは、各先生にいろいろと会場からご質問をいただいておりますので、それにお答えいただくという形で進めたいと思います。今日は本学の学生もたくさんお見えになつております。最初は学生さんからの質問です。「具体的にどういふところがよくて、移転先が鶴見に決定したのですか」。鶴見が移転先として名前が出されて選ばれた、その理由は何だったのでしょうかという質問です。納富先生、お願いします。

納富

微妙なご質問でございますけれども、東京府下や大分県・長野県・宮崎県などから提出されました建白書や請

願書によりますと、東京周辺がもつとも望ましいこと。なおかつ廉価であること。適当な場所というふうなことが書いてあります。そういうことです。まず廉価であるということや、東京に近いということ、それから、そこまで考えていたかどうかはわかりませんが、私の類推では、当時、国際的な窓口というのは、横浜港なんですね。従いまして、東京と横浜の間というようなことも、考えられたのではないのでしょうか。要するに、八王子や松戸という話もありましたけれども、土地（建設用地）入取の問題や経費の問題など、いろいろ勘案して、できるだけ効率的なところはどこかと検討を加え、熟議の結果、やっぱり成願寺が土地（境内）を寄付したということもあつて、鶴見に決定したと私は考えております。

司会

はい。次に、「6月5日人夫を雇い秘密に巡視す」とありますが、秘密に巡視した理由は何故ですか。また「土地献納を極秘に談示」したのは何故ですか。」という質問です。

納富

「秘密に巡視す」、或いは「土地献納を極秘に示談した」のは何故かという質問ですね。それは地元（鶴見）Ⅱ地域社会の了解をとっておりませんから、秘密に巡視するのは当然です。また成願寺の土地献納を極秘に示談したとありますのは、成願寺の境内を献納することについては、住職の独断ではできません。成願寺の檀家をはじめ、本寺（建功寺）や同門（永昌寺）の了解が必要です。また地元にも少なからぬ影響がありますから、極秘に取り決めたわけです。また總持寺とその末寺である建功寺の末寺（孫寺）である成願寺と内々に取り決めても、總持寺は永平寺と同列の曹洞宗大本山でありますから、永平寺の同意を得なければならぬこと。また總持寺には一万余の末寺がありますから、末寺の了解Ⅱ末寺の代表者会議である曹洞宗諮詢会で賛成を得る必要がありましたから内々に話を進めたわけです。その経緯を簡単に述べますと、

- (1) 栗山泰音が明治三十五年五月二十八日に鶴見を極秘に探検する。
- (2) 明治三十五年八月は道元禅師の六百五十回大遠忌が永平寺で奉修される
- (3) 栗山泰音が明治三十六年七月三日、成願寺と土地献納を極秘に談示する
- (4) 明治三十七年二月、日露戦争勃発により再建事業停滞する
- (5) 明治三十九年二月二十六日、成願寺より「移転再建敷地献納願書」および地元有力者八人による「旨趣賛同書」提出
- (6) 明治三十九年七月十日、永平寺森田悟由禅師の同意書を得る
- (7) 明治三十九年七月二十三日、『北国新聞』・『政教新聞』が總持寺鶴見移転を報道
- (8) 明治三十九年七月二十六日～二十九日、曹洞宗諮詢会開催（賛成多数）し、移転地鶴見に決定
- (9) 明治三十九年八月二日、能本山非移転同盟倶楽部設立（本部は穴水の門前区長小向茂平宅）
ついでに移転の動向について述べますと、
- (1) 明治三十一年四月十三日、火災により主要伽藍が焼失する
- (2) 石川素童大本山總持寺東京出張所監院 明治三十一年四・五月の『宗報』第三十三・三十四号で罹災状況を宗務局・全国の末寺に報告
- (3) 宗務局は明治三十二年十一月五日、大本山總持寺諸堂再建の告諭、諸法規発令
- (4) 明治三十二年十一月十三日（告諭後八日）、東京府下曹洞宗寺院住職能親会「東京移転建白書」提出
- (5) 明治三十三年二月、国有林首山・鶴山の二箇林を再建地設備上境内への編入願提出
- (6) 明治三十三年六月十三日、大分県有志寺院による建白書提出
- (7) 明治三十三年七月十七日、長野県北部曹洞宗寺院住職・檀信徒、本山移地建白書提出

(8) 明治三十三年八月十八日、十月六日、十月十五日、長野県曹洞宗寺院住職・檀信徒による請願書提出
(9) 明治三十三年十月五日、宮崎県宗務支局、「能本山移転之建白書」提出

このように移転建白書や請願書が、次々に提出されました。内容は東京府下から提出されたものと大同小異ですが、東京府下から出された建白書の後に、門前町境内(旧地)に国有林の編入願を出しています。これはこの時点までは旧地(祖地)再建を目指していたことがわかります。また大分県からの建白書に「我大本山總持寺ヲ以テ東京ヘ移転スルコトハ明治二十九年九月十二日既ニ建白書ヲ奉呈致シ置キ其ノ地論ハ如何哉」とあることは、火災前から移転の気運があったことがわかります。また本山移地転境書類の中の「覚書」に、明治初年から金沢移転説があったことが記されており、注目しなければなりません。また東京府下曹洞宗寺院住職能親会からの「東京移転建白書」に「諸宗ニ率先シテ之ヲ輦轂ノ下ニ移スト同時ニ宗門百年ノ大計ヲ諸嶽總持ノ頂キニ樹テ」とあることや、長野県北部から出された總持寺東京移転請願には「恐レナガラ今上陛下(明治天皇)ハ桓武天皇以來殆ド千百年間帝都タリシ京都ヨリ現今ノ東京ニ移リ以テ帝都ト奠メラレ候」とあり、また「大本山總持寺ハ昼夜ノ警戒極メテ嚴ナルニモも拘ワラズ一瞬ノ間ニ焼失シタルハ或ハ太祖国師大寂定中ニ在ツテ位置ヲ転スルノ機ヲ促サレタルヤモ計リ難ク候」とあることも無視できません。

司会

ありがとうございます。それで、先ほどの成願寺さんなどの話ですけれども、これは会場の方からです。「總持寺が能登から御移転するにあたり、成願寺や建功寺の役割が大きかったように思われるのですが、これらのお寺と總持寺の現在の関係はどうなっているのでしょうか。」

納富

それについては明治四十年(一九〇七)三月十日に成願寺に対して、總持寺移転再建敷地献納について「定書」

があります。それには当本山は成願寺に対し、自今左の件々を実行するとして、八項目が列記されています。

(1) 成願寺ハ永久本山々内寺院トシ、慣例ニ基タル特待ノ待遇ヲ与フ。

(2) 成願寺住職ハ永久本山知客ノ役位ニ摂ス。

(3) 成願寺ニハ永久本山ヨリ毎年金貳百円ヲ支給シ其ノ歳計補助費ニ充テシム。但シ毎年六月・十二月ノ二回ニ金百円宛ヲ支給スルモノトス。

(4) 成願寺ニハ永久本山ヨリ毎年金拾円ヲ支給シ其ノ伽藍修繕費ニ充テシム。但シ毎年十二月ニ支給スルモノトス。

(5) 成願寺ト其ノ本寺タル建功寺トノ本末関係ハ永久現在ノ儘ニ維持シテ変更セシメサルモノトス。但シ建功寺ハ特ニ本山近門寺院ニ摂ス。

(6) 成願寺ト其ノ檀徒トノ寺檀関係ハ永久本山ヨリ之ヲ変更セシメサルモノトス。

このように成願寺は總持寺山内寺院として特別に待遇し、住職は永久本山の知客しか(接待役)の役位にするとともに寺院経営費・伽藍修繕費を支給する。また建功寺との本末関係や成願寺の寺檀関係は変更をしないとあります。なお建功寺も近門寺院に列すとありますが、その外に褒命旨趣により永代色衣の着用を特許されています。しかしその後現在までには何回も宗制が改められていますから「定書」も改められたと思いますが、具体的には成願寺・建功寺に聞かないとわかりません。また両寺と總持寺の關係は両寺とも總持寺末であることは言うまでもありません。本末關係を示しますと、總持寺直末總寧寺(千葉市川市)、その末寺清源院(神奈川厚木市)、その末寺龍散寺(神奈川愛甲郡)、その末寺建功寺、その末寺成願寺となっています。

司会

ありがとうございます。納富先生に集中しますけれど、「御移転の本意は、なんだったのでしょうか」という

質問もあります。「御移転の遠因は、困窮、負債等とのことですが、借財をしてまで遂げたかった御移転の本意は、なんだったのでしょうか。」と。

納富

前の質問にも答えました移転の動向の中に、東京府下から出されました「東京移転建白書」の後に、門前町の境内に隣接する首山と鶴山の二箇の国有山林を再建地設備上境内への編入願を石川県庁に提出していますから、この時点までは旧地に再建する計画だったことは間違いありません。しかし明治維新になり時勢・制度ともに変革したので新たな興法利生策を講ずる必要があること、能登の辺境では交通・参拝に不便であるから明治初年から金沢移転説があったこと、石川県下の曹洞宗寺院百十ヶ寺、檀家三千三百九十戸であるのに対し、東京周辺であれば対象は全国の曹洞宗寺院一万四千百四十六ヶ寺、檀家百十一万四千七百七十四戸であることや、長野県の請願書に、今や東京は帝都として、中央政府の所在地として、商工業の發達地として日本全国の国民のみならず、外国国民に至るまで集合する所で、経済上有利であること、またさきほど木村学長も言われました都市教化＝布教伝道に有益であること、これはさきほど私が結びのところで述べましたように、瑩山禪師が終生目指された民衆教化に適うものであるばかりか、道元禪師の『御遺言記録』の世に随い、時に随い、実践する所がもつとも勝れた所とあることや、また『正法眼蔵隨聞記』に只時にのぞみ事に触れて興法利生のため、すべてを斟酌すべきであると述べられている立場にも適っていることは確かです。

司会

納富先生、もう一つだけ。「御移転の直接原因は明治三十一年四月十三日の火災となっておりますが、火災は何故起こったのですか」という質問です。

納富

これについては罹災状況を詳細に宗務局や全国の末寺に報告しました『宗報』第三十四号（明治三十一年五月十五日発行）に「今回に於ける大火災の原因に就いては、其調査未だ正確ならざりしが、右は全く法堂の西入側なる洋燈より発火せしものなりと云ふ」とありますから、法堂（説法する道場、後には仏殿が法堂を兼ねるようになる）の西入口の側に置いたランプが火元だったようです。当時ランプは能登地方ではどれほど普及していたかわかりませんが、總持寺では利用していたものと思います。

總持寺では何回も火災にあっています。『鶴見大学仏教文化研究所紀要』第九号（平成十六年四月発行）に判明している限り報告しましたように、（１）永禄四年（二五六二）十一月十五日、（２）元亀元年（二五七〇）兵火、（３）天正十八年（二五九〇）妙高庵、方丈、仏殿、大庫裡、山門その他、（４）、慶長二年（二五九七）方丈、（５）慶長十九年（二六一四）如意庵、（６）文化三年（一八〇六）一月二十一日、如意庵、仏殿、禅堂、妙高庵、伝法庵、大庫裡など十七棟（普蔵院、洞川庵は免れる）などです。とりわけ文化三年の火災については発生から再建までの詳細な記録があり、紀要に述べておきましたから、お読み頂ければと思いますが、火災は伝法庵開基大徹宗令（一三三三～一四〇八）の四百回大遠忌（正当は一月二十五日）法要の準備中で立て込んでおり、発火元の如意庵には典座（食事をつとめる役）と侍真（開祖像に給侍する役）が留守居している時に、風聞といわれていますが、内々に飲酒し泥酔のあまり失火に及んだとされ、以後總持寺では薬用酒も無用とするほど飲酒を禁じ、火の始末を厳重にしております。これは總持寺のみならず、一般寺院や一般家庭でも火の用心については心を配っていますから、明治三十一年の火災は油断によるものと言わざるを得ません。

司会

この質問をされた方は、短大部の学生さんですが、質問の続きがございまして、この方が思ったことなんです

ね。「先生のお話の中で、「火災が起こる前から移転を考えていた」とあったのですが、このことから、移転しやすくするために、関係者がわざと火災を起こしたのではないかと考えてしまいました。」って書いてあります。一応紹介しておきます。

納富

このような穿った考えも起こるかもしれませんがね。ある人から全焼したにも拘わらず、古書・古文書・美術品などの文化財だけがあまりにもたくさん、立派に残っていることから不思議だと言われたことがあります。しかしそれは移転の建白書や請願書が提出されている最中に、さきほども触れましたように、總持寺は国有林の払下げを受け、境内地に編入する願書を提出しております。また明治初年金沢移転説がありましたのも、明治維新になり、すべてが変革したので、新たな興法利生策を講ずるためのものであり、また大分県から明治二十九年九月二十一日東京移転を建白した意趣については、具体的に触れていませんが、同じような意向であったと思います。このように前々からの動向があつたからといって短絡的に火災を故意に起こしたとは考えられませんし、それは絶対にありません。

司会

関根先生には、「御真龕とは何ですか」というご質問があります。

関根

はい。実は、私もはっきりとはわからなかつたことです。字引を引いたりしましたが、素人ですから、明確にはまだわかりません。でも、一応調べますと、御真龕の「龕」というのは廚子のようなもので、位牌だとかを入れて二重扉で開くような、神仏を安置するケースだというふうなことが書いてありました。多分そんな箱だろうと思います。その中に、御真牌といわれるものを入れて、お運びになったのではないかと思います。

それで、新聞等を見ますと、その上に錦欄の布を被せたというふうに詳しく書いてありますから、御真牌が御真龕の中に入って、その上をさらに布で五色を被せた、こういうふうなことだと思います。それが、最乗寺に来た時に、夕日に大変輝いて綺麗だったというふうに新聞には伝えられています。

司会

その御真龕はたくさんの方々に担がれたのですね。

関根

「十六名に担がれた」と書いてあります。けれども、どうもそれらが太雄山最乗寺に、在田証宗師と川口亮純師が到着した時に運んだとは思えないような感じがします。『北國新聞』の十月二十六日の記事には、すでに最乗寺に御真牌等が届いており、經典も含めてたくさんのもが運ばれていたというふうに書かれています。そう考えますと、お二人の方は、もしかしたら御尊牌だけをお持ちになって、太雄山に着いてからそれを御真龕の中に入れて、太雄山から十六人の僧侶が担いで運んだと思われる。鶴見に着きますと、馬車で運んだものもあるということですから、そこには經典もあつたようにも感じられます。そのあたりが、新聞によって各々違います。特に新聞をいろいろ読んでいきますと、今度は時間が全然合わないのですね。日付も合わない。そして、ある新聞には、禅師様は太雄山に上がられて、それをお迎えに行ったと書いてあります。他の新聞には、貫首代理の平野大仙師が回向されたというふうになっています。さらに調べていきますと、国府津駅近くに案下所があつて、その近くの「鳶屋」という旅館に禅師様はお泊りになった、と書かれています。従つて真実はわかりません。しかし、いろいろな記述を照らし合わせますと、多分、石川禅師様は太雄山に上がっていないと思います。御真龕を屈強の十六人の僧侶が担いで降りてきた、こういうふうに書いてあります。そして、小学校の講堂に安置した後、小田原街道を過ぎますと、緋毛氈を敷いた真田三吉宅の「紀

三」に安置したと伝えています。次いで国府津の駅に着きますと、蔦屋の別館に安置されました。そこには、たくさんの方が手を合わせに来たと書いてあります。だから、実際に別院から御真龕などのものの他に、いろいろな宝物が大雄山からその時に運ばれているようです。もう少し、いろいろと調べてみたいとわからないのが実情です。

司会

イメージとしてどうかわかりませんが、今日の先生のお作りいただいた資料の中の、西有穆山禪師の葬送の写真の中に、お棺を担いでいる写真がありますよね。あんなイメージでいいかなというふうに思いますけれども、いかがでしょうか。さて、時間の方も押しております。いろいろな会場から質問いただきまして、すべてにご解答いただくということは、ちょっと難しいとは思いますが。関根先生、先生は今日は制約された時間の中でのご発表でしたが、今度は生涯学習セミナーでのご発表の機会もございますね。

関根

今年の十一月五日、このあたりがちょうど御移転百年目になります。そこでは、昨年十一月に「プレパネル展」というのをやっておりますので、少し資料も新しいものを入れたいと思っています。是非十一月の御移転のところに合わせまして、ここ（大学会館）の一階のところで開催します。パネルを百枚くらい、またお見せして、皆様のご意見を伺って、当時の總持寺のご様子を堪能していただきたいと思います。よろしく願います。

司会

それでは、学生さんから木村先生にお伝えしたいことがあります。「入学式がなかったので、学長先生に今日初めて会えました。」と喜んでおられます。ついでに納富先生のところにも書いてありまして、「頓知のきい

た先生だと思いました。おもしろかった。」と書いてあります。

納富

ありがとうございます。しかし私は頓知がきくほど頭の回転はよくありません。また老耄しておりますので一言及するのを忘れてしまいました。それは境内地を献納した後の成願寺の再建についてです。佐久間権蔵日記にその件に触れていますから紹介しておきます。それは「明治四十五年一月十四日、日曜、晴、池田丑五郎、谷川竹蔵来り、本山ニテ成願寺ヲ建設ノ為メ青山ニテ相当寺院ヲ買収シ、近日引キトリ建築方ヲ何人ニ力命スルニツキ、谷川二下命運動ヲ懇々予ニ依頼ス」とあります。これは青山で買収した寺院で再建したことを示すものでしょう。

司会

はい、ありがとうございます。それでは木村先生、いくつかの質問をまとめてお答えいただきましょう。「木村先生は、これからの総持寺ということで、社会福祉事業をあげておられますが、その原点は命を守ることだと思えますが、長年にわたり一年間に三万人もの方々が自ら命を断っております。現今の社会情勢と共にこのことに対する対応及び防止等がありましたら、お考えをお聞きたいと思えます。」それから、社会福祉に質問が集中しておりますが、「大学の社会福祉の講義内で、第二次世界大戦前には、あまり社会福祉事業というものはみられなかったと学んだのですが、明治時代の社会福祉事業への進出とは、具体的にどのようなものなのでしょうか。現在のものとは違いはあるのでしょうか。」と。それから保育科の学生さんから、「女子教育は、光華女学校ではどのように行われていたのか。いま私たち学生が受けているものとはどう違うのか」とあります。そういった女子教育について、まとめてお伺いいたします。

木村

ご質問ありがとうございます。社会福祉事業というのは、先ほど、納富先生の方からお話ございましたけれども、瑩山禅師様の思いといいますか、願いといいますか、そういうものに基づけば、当然のことながら、進めていかなくてはいけないことだったと思います。ただ、当時は明治初期の神仏分離令等によって、仏教が現実には、経済的な面も含めまして、厳しい状況におかれていました。その中で改めて社会と人間のリアルなすがたやその中で仏教は何をなすべきかといったことを真剣に考えていかなくてはならない、そういう流れができてきて、求められるさまざまな側面の事業が行われたのではないかと思うのです。

先ほど、公益質屋というのをあげました。これも広い意味で、貧しく困っている人に、一時的に、おそらくかなり低い利子で、物を預かってお金を貸すということだったでしょう。あるいは、孤児たちの面倒をみるとか、お年寄りや困っている人に対して病院を作ってケアをすとか、あるいは母子寮を作るとかですね、さまざまな方策をとって、社会福祉を進めたと考えられます。そのうちのいくつかは、現在までも受け継がれてきています。なお、質屋は、現在では社会福祉の枠組みには入らないかもしれませんが、しかし、当時としては、その中の一事業とみなしてもよいと思います。

それから、この問題に関連して、命を守るということについてお話がございました。そして、具体的に、自死、自殺の問題を取り上げられました。私自身も、命はもちろん大事なものであり、命の尊厳性というのは、基本的にきちんとして守り、受け継いでいく、自らの生き方の中で確かな位置づけをしなくてはいけないと考えます。しかし同時に、仏教者のあり方としては、命とは何かということを深く考察し、その見方を正しく人びとに説き広めていくべきではないかと思うのです。例えば、命というものは、いわば共生的に存在するということが、命は決して実体ではなく、縁起的に存在するということが、言葉を代えれば、仏の力に支えられているということ。そういう命の本質的なありようというのか、そういうことをあわせて伝えていくとい

うことが、私は大事だと考えています。

現代においては、人の命が絶対化される傾向があります。身体的、生理的人間の生命だけが絶対視される。だから、逆に亡くなること、命を失うことによつて、人は無価値なものに転ずるということになってしまう。だが、そうではない。命そのものが、生も死も含めて、縁起的な場において初めて成立するものだからです。そのことをしっかりと伝えていくといえますか、そういうことをあわせていていかなければいけないじゃないかと思うわけです。

自死、自殺の問題は、現在曹洞宗でも、大変大きな問題の一つとして取り組んできているものだと思います。ただ、実は、この問題は、思うに、簡単に議論できるものではありません。もちろん、命を粗末にしてはいけません。大事にしなくてはいけない。その限りにおいて、自死、自殺は決して勧められるものではありません。けれども、簡単に自殺する人について「それは間違いだ」と断罪するわけにはまいりません。おそらく、少なくともいくつかのケースについては、その状況というものを深く見極めますと、今回の大震災で命を失った方々に対して何も言えないのと同じような問題がその背景にあるのだと思います。外からは見えない、わからない世界です。そのわからない世界を知らないままに、いい加減なことは言えないでしょう。そういうところでまず、命の問題を捉える。そのところがないと、私は駄目だと思うのです。そこを踏まえた上で、命を大切にという説き方をしていかないと、本当ではないのではないのでしょうか。

もう一つ、過去の女子教育の問題でございますけれども、具体的に、光華女学校とか、初期の鶴見女子高校でどのような教育が行われていたのかは、詳しい資料が残っていないため、その詳細は分かりません。けれども、現在伝えられてきております「建学の精神」、すなわち「大覚円成 報恩行持」というのは、その出発の時点から明示されています。釈尊の悟りといえますか、それを人格の完成という捉え方をいたしました。

まずその人格完成を標榜する。そして、そのためのありようとして、道元禅師以来重視されてきた「行持」と、特に瑩山禅師、峨山禅師が強調された「報恩」を掲げて、女子教育がなされていたと思います。もちろん、まだこの時代、大正年間には、ある時期、女性の男性に対する平等性が叫ばれてはいますけれども、現実社会の中で男女の平等が実現する側面というのは極めて小さかったでしょう。そういう中で、自立できる、しかも、周りに対して感謝の気持ちを忘れないという仏教的な報恩の精神をしっかりと身につけた女性を育てていこう。——そういう理念で教育にあたっていたのではないかと考えております。以上です。

司会
ありがとうございます。これも学生さんからのご質問なんですけれど、「新しいグループホームについてもっと知りたい」と言っておられます。木村先生、よろしくお願いします。

木村
本学では二年前から、現在の厳しい状況の中で、大学ないし総持学園をどのように再生させるかということで、大学の、また学園全体の再構築について一生懸命議論して、そこで出た方策を、今、できるところから具体化していつているところです。ご質問のあったグループホームの問題もその議論を進めていく中で出てきたものでして、まだはつきりしたイメージが固まっているわけではありません。従来のホスピス、あるいはビハラと呼ばれるものは、例えば、癌であと余命何ヶ月とか一年とか宣告を受けた方々を受け入れて、その方々が死を心安らかに迎えられるようにするという形が基本になってきているものですね。それから、グループホームというのは、私も詳しいことは知らないのですけれども、豊かな充実した老後の人生を生きられるようにするというのが主眼のようです。つまり、老後の生の充実のための介護といえますか、ケアといえますか、それが中心です。後者は続いていく生が前提、前者は予期される死が前提です。私が思いますのは、

これら課題と役割を異にするとみなされている二つのものをつなげるような施設です。それは、実現すれば、生と死が貫かれていると説く禅の教えを具現することにもなると考えるのです。

先ほどの命の問題とも関連するのですが、生と死とは、決して断絶ではありません。実は吹き抜けになつて
いる世界です。その世界を大らかに受け止めながら、そこにはいろいろな人びとが出入りする。その中でさまざまなきいきとした活動が展開するというイメージです。

例えば、本学には短期大学部に付属する幼稚園がございます。御本山には保育園がございます。それらに通う子供たちとも接触ができると同時に、例えば、お坊さんの話、生死を越える境涯とはどういうものかといった話も聞ける。道元禅師は、生死を季節の移り変わりに喩えておられますが、自然に季節が動いていくような、そういう大きな流れの中で、生涯を最後まで充実して過ごし、かつ、安らかに終えられるような場、完全なものは難しいかもしれませんが、それに近づけるようなものを具体的な形にできないかと考え、議論を進めているということでございます。

司会 質問票に沿つてお答えいただいてまいりましたが、ここで会場の方々からお願いいたします。是非これは聞いておきたいということがありましたら。

会場 木村先生のおっしゃる「グローバルイズム」というのは、英語ないし、外国語を教えるということなのでしょう。これに関しては、会社でもそういう試みはありますが、これを大学でやるとしたら大変だと思えます。また、仏教系の大学というのは、昔はそんなに多くはなかったですが、今ではたくさんありますし、歯学部に関しては、経営の問題もありますので、そういうところを高い見地でお考えにならないと、ますます厳しくなっ

ていくような気がいたします。そのことについて、木村先生のご意見を拝聴したいと思います。

司会

はい。ちょうどこちらに、最後にお答えいただくかと思っていた質問がございます。ただ今、ご質問いただきました内容と、重なる部分があると思いますので、木村先生にお答えいただきたいと思います。「この先の百年に向けての展望として、国際化の推進と拡充・地域貢献・学園との連携強化等をあげておられましたか、それらに対する障害や、課題として、具体的にはどのような問題があると先生は考えておられるのでしょうか。」という質問がございます。あわせてお願いいたします。

木村

今ご質問いただきました内容に詳しくお答えするには、おそらくあと三十分か一時間はかかるでしょう。今は、私どもが考えておりますことの要点だけを申し上げたいと思います。

「グローバルズム」というのは、おっしゃるように、英語が国際語として急速に広まってきたために、その言葉を通じて、世界が一つの方向へと大きく動いているわけですから、大学の学生にそれを習得させる教育を強化するというのも、その一環ではあります。しかし、先ほど講演の中で申し上げましたのは、御移転にかかわることございまして、大本山總持寺に是非こうあつてほしいという方向の一つとして、現在のグローバルズム、簡潔に言えば、政治・経済・文化など、ほとんどの分野における世界的な一元化・画一化に対応しての国際部の拡充ということを申し上げたのです。国際部は現に、例えば外国の方々、英語圏の方々のために参禅会を行うとか、外国への布教の支援をするとか、そういったお仕事があると思いますが、さらに例えば、大がかりにインターネットを使つて積極的に瑩山禅の素晴らしさを世界に向けて発信するといったことです。それから、御本山の中での国際部の位置づけを高めて、国際部の部長さんの発言がこれま

で以上に重いものとして受け止められるということになっていってほしいということもございます。

最後に、教育と経営の問題でございますけれども、それはご指摘の通り大変厳しいものがございます。とくに歯学部の入学生志願者の減少という現状は大きな問題です。この問題の背景には、日本社会の少子化ということがありますが、これまで、大学として大学の良さを十分に宣伝できなかったことも関係があるように、私は思います。例えば、歯学部には付属の病院があり、学生のみなさんはしっかりと実習ができます。また、先生方は大変丁寧な教育をされています。そういう良さをもちとまうく宣伝していくということが一方で大事だと考えています。

もう一つ、これまでやや疎遠であった同窓会や父母会の方々とのつながりをもっと強化して、ヒューマンリーションの輪を広げていくことも大切でしょう。この点についてはすでに具体化を進めているところでございます。

ただ、何といっても本学の一番の良さは、私は、しっかりした禅の精神、建学の精神をふまえた人間教育ができることだと思います。ですから、「人間力」という総合的な人間としての魅力や信頼感をしっかりと身につけた学生さんを育て送り出していくところに、教育の面では特に重点をおいております。それが、本学がほかの大学に比べて、対等以上にやっていけるところではないかと自負しているわけです。

司会

会場からまだご質問があるかと存じますが、ちょうど時間でございます。今、木村学長から、これからの展望・課題といったことにも触れていただきまして、シンポジウムの締めくくりにふさわしいと思いますので、以上で終わらせていただきたいと思います。最後に学生さんからですね、「今日、この講演を聞いて、シンポジウムに出て、三ヶ月前の十一日に起こった大震災で亡くなられた方々のため黙祷もできまして、改めて自

分の命や人の命の重みと大切さを学ぶことができました」と感想を書いておられます。こういった感想もいただけた。今日は、大本山總持寺の御移転をめぐる第三回のシンポジウムでございましたが、先生方からいろいろと貴重なご発表をいただき、またお話を伺うことができました。ありがとうございました。以上をもちまして、シンポジウムを終わらせていただきます。

総司会 パネリストの先生、司会の先生、ありがとうございます。三時間、あつという間に過ぎました。最後に、

仏教文化研究所研究員・本学副学長、そして、歯学部教授であります、前田伸子先生より、閉会のご挨拶をお願いいたします。

前田

本日は大本山御移転百年記念平成二十三年度鶴見大学仏教文化研究所公開シンポジウム「御移転の真実を探る」に、足元が悪い中、多数の皆様がお出でいただきまして、ありがとうございます。シンポジウムというものは、講師・パネリストの講演だけではなくて、その場に今おられる皆様方が、積極的に参加をしてくださっていることで、はじめて成立するものだと思います。昨年度のシンポジウムでも思ったことですけれども、本当に今回のシンポジウムも無事に、あるいは成功裏に終了いたしましたのは、今回お集まりいただきました皆様方の、非常に鋭い、あるいは活発な、あるいは熱心な質問・ご討議があったからだと思います。大変感謝しております。また、先ほど、学生さんの感想の中にもございましたように、東日本大震災からちょうど三月過ぎまして、今回このシンポジウムのこの場で、皆様方と一緒に黙祷を捧げられたことを本当によかったと思っております。また、来年、お目にかかることを楽しみにいたしまして、今回のシンポジウムを終了いたします。本日はどうもありがとうございました。